

# シュリー・ハヌマーンと癒やしの山

## 『ラーマーヤナ』の物語から

この物語はヴィシュヌ神の生まれ変わりであるラーマ神と、ラーマの妻のシーターを誘拐した10の頭を持つ魔王、ラーヴァナとの壮大な戦いの中で起きたものです。シーターを救うべく向かうラーマ神とその弟ラクシュマナに加勢しているのは、ラーマ神に献身する弟子のシュリー・ハヌマーンとサルヤクマの大軍です。

戦場でラーマ神とラクシュマナは並んで立ち、まさに矢を放とうと弓を引き、しっかりと身構えていました。彼らの顔は輝き、眼は曇りなく集中していました。彼らの姿は堂々としたものでした。

ラーヴァナが戦車に乗って近づいてくると、その顎は引き締まり、二人の兄弟を負かそうという決意が表れていました。彼は矢を間断なく放ちながら、天界の武器であるアストラの力に祈り、撃ち始めました。ラーマ神とラクシュマナも撃ち返し応戦しました。

ラーマ神とラーヴァナの軍隊は、どちらも師たちの戦いを見ようと、戦うのを中止しました。彼らは矢とアストラが稲光のように火花を上げているのを見て驚き、息をのみました。そのような中で、シュリー・ハヌマーンは、マインドと心を敬愛する神に集中し続けました。彼は全身全霊をかけてラーマ神の勝利を祈り、「ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ」と、その名前を唱え続けていました。

ラーヴァナは今、ラーマ神の弟に注意を移しました。怒り狂ったまなざしで強力なアストラに祈りをささげると、とどろくようなうなり声と共に、ラクシュマナに向けてアストラを投げつけました。

ラーマ神の軍隊は、アストラが空を貫いて的に当たるのを、がくぜんとして見守りました。それはラクシュマナの胸を貫き、彼は意識を失ってラーマ神の足元に倒れてしまいました。戦場は衝撃のあまり静まり返り、ラーマ神の苦悶(くもん)の叫びのみが、その静寂を破りました。

ラーマ神はラクシュマナの横にひざまずき、その胸から武器を取り除こうとしましたが、それは彼の手の中で壊れてしまいました。

ラーマ神はハヌマーンを呼んで言いました。「祝福されたサルよ、お前の生命を懸けて、私の弟を守っておくれ。私はラーヴァナを負かす。そしてこの戦いの物語は、太陽と星が天を照らす限り、世に語り継がれるだろう」

ラーマ神は、熱意も新たに立ち上がりました。今戦いは、いっそう激しいものとなりました。辺りには弓弦のビューン、ビューンという音や、矢のシュツ、シュツという音がこだましています。ハヌマーンは1匹の若いサルを呼び寄せました。

「早く、走って医者のスシェーナを連れてきなさい。彼ならラクシュマナを助けられるかもしれない」と、ハヌマーンは言いました。

その一方で、ラーヴァナは、ラーマがとどまることなく放つ矢に疲れ始めていました。この悪魔は休憩しようと、戦車の向きを変え戦場から逃げ出しました。戦いはまた、翌日に続くでしょう。

ラーマ神の軍隊は、ラーヴァナが去っていくのを見て大喜びでした。しかし、神自身は悲しみに満たされていました。弓を地に投げ置くと、再び弟の傍らにひざまずきました。

「弟よ」と、ラーマは泣きました。「今、私を見捨てないでくれ。お前は私が王国からキシュキンダーの森へ追放された時にも、ついて来た。私がランカーにシーターを救いに行った時も、いつも共に歩んでくれた。お前はいつも、私を支えてくれた。今お前が私のそばから居なくなってしまうたら、私はどうやって戦うことができるだろう」

まさにその時、スシェーナが到着しました。ハヌマーンに促されてラクシュマナを診察すると、彼はラーマ神に言いました。「おお、高貴なお方よ、嘆くことはありません。ラクシュマナはまだ生きています。ご覧なさい、彼はまだ息をしています」

ラーマ神はスシェーナを探るように見ました。「本当の事を言っているのか」と、彼は尋ねました。「ラクシュマナはこれほどの傷を受けても、生きられるのか」。スシェーナは厳かにうなずきました。そして、偉大なサルの方に向きました。

「ハヌマーン」と、スシェーナが言いました。「あなたが唯一の希望です。あなただけがラクシュマナを助けられる」

「どうすればいいのか」と、ハヌマーンは尋ねました。「言うてくれれば、私は喜んでしよう」

「むずかしいことだ。普通なら何カ月、あるいは1年も掛かる任務を一晩でやり遂げなくてはならないのだ」と、スシェーナは答えました。「あなたは自らの強さと決意、内にある偉大な力のすべてを使わなくてはならない」

「私の神に仕えるためならば、どのようなことでもしよう」と、ハヌマーンは答えました。

「大海を越えて、北方に向かい高いヒマラヤに飛ばなくてはならない」と、スシェーナは続けました。「山の上空に着いたなら、癒やしの山の輝く頂を見つけなさい。そこは自らの光で輝く薬草で満たされている」

ハヌマーンはうなずき、スシェーナが続ける言葉に一心に耳を傾けました。「山の頂に4種の香り高い薬草がある。サンジーヴァニは、死にかけている者を復活させ、すべての傷を癒やし回復させるものだ。急ぎなさい、ハヌマーン！ 月が沈み太陽が昇る前にそれらの薬草を採集して戻ってくれば、ラクシュマナを救うことができるのだ」

スシェーナの言葉は、ハヌマーンの決意の炎を燃え上がらせました。これでラクシュマナの命を救い、私の神に仕えることができるならば、それで良い。与えられた任務はほぼ不可能であることを、彼は知っていました。12時間という短い時間で大海を渡り、ヒマラヤに飛んで行かなくてはならないのです。しかし彼は、ラーマ神の恩恵があれば、何事も可能であり、成されることも知っていました。

彼がそのような吉兆な考えを持つと、ハヌマーンは本来の見事な大きさになりました。木々を超えてそびえ、頭はほとんど雲に届くほどでした。彼は呼吸、思考、行為のすべてをラーマ神にささげて、まなざしを遠い北方に定めると、3歩大股に踏み出し空中に飛び上がりました。

彼はまるで燃え盛る彗星(すいせい)のごとく空を飛んで行きました。彼の父親であり、風の神として、世界の呼吸であるヴァーユのような速さで飛びました。雲は彼の行く手を開き、すぐに強い風が巻き上あがり、彼をより速く前進させました。波立つ海を眼下に見ながら、ヴァーユ神の支えに感謝しました。心の中では、絶え間なく彼の神の名を唱えていました。

ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ、ラーマ。

白サギの群れ、水牛の群れ、急流、穏やかな湖、混み合った町、小さな村が眼下を通り過ぎて行きました。ラーマ神の姿を常に心に抱きながら、彼は空を大急ぎで飛びました。

間もなく荘厳なヒマラヤが、地平線にうっすらと大きく見えてきました。ハヌマーンは雪に覆われた巨大な山頂を見て、スシェーナが語った輝く頂を探しました。すると突然、夜空に輝く宝石のような光を見つけました。近づいていくと、キラキラと輝く癒やしの薬草が見えました。葉はきらめき、茎は水面に映る月光のごとく銀色に光っていました。

ハヌマーンはほっとしてため息をつきました。やっと探していたものが見つかったのです。しかし彼が山に着陸しようとする、その神秘的な薬草は彼が近づくのを察して、輝く光と共に地面に引っ込んでしまいました。

突然の暗闇の中で、ハヌマーンは苦悩の叫びを上げました。「愚かな薬草よ、どうして隠れるのだ。今晚、おまえはラーマ神に仕え、ラクシュマナを救えるというのに。これ以上の高い目的があるだろうか。それ以外の何のために生えているというのだ」

ためらうことなく、ラーマ神のことだけを考えるハヌマーンは、全身の力を込めて山の麓を手で抱えると、持ち上げ始めました。雷鳴のような音がとどろきました。ハヌマーンが山全体を引き抜いてしまったのです。

彼は山を空に持ち上げました。木々も川も、流れ落ちる滝、大小の生き物、黄金、水晶、そして輝く薬草も、すべてそのまま持ち上げたのです。森に住むすべてのものが、彼の手柄を褒めそやして歌いました。ハヌマーンはほほ笑むと、山を贈り物のように手のひらに置き、彼の神のいる方角に向きました。

ハヌマーンは、必ずや夜明け前に戻りラクシュマナを救おうと、高く素早く飛びました。天上の神々は、彼が巨大な山を手のひらに平衡を保ちながら載せて飛んでいるのを、驚いて見下ろしていました。

ハヌマーンがランカーに戻った時には、東の空にはピンク色と金色の光が射していました。太陽がまさに昇ろうとしているのです。ということは、もう時間がありませ

ん。ハヌマーンはスシェーナを見ると「山をどこに置きましょうか」と、下に向かって呼び掛けました。

スシェーナはハヌマーンが山全体を抱えているのを見て、畏敬の念に打たれ、急いで場所を示しました。ハヌマーンが山を置くや否や、スシェーナは山の斜面に登ってその強力な薬草を大急ぎで探すと、両腕に抱えるほど摘みました。

そして、ハヌマーンを大声で呼びました。「早く、ラクシュマナの所へ私を連れて行っておくれ。もうほんの数分しか残っていない。その間に私は薬草を押しつぶそう」。ハヌマーンはスシェーナを腕に抱えると、ラーマ神がラクシュマナの傍らでひざまずいている場所に飛んで行きました。

スシェーナが、ラクシュマナの鼻先に押しつぶした薬草を持っていくのを、誰もが息を潜めて待っていました。すると、奇跡が起きました。ラクシュマナが強力な癒やしの薬草の匂いをかぐや否や、傷が治り始めました。あたかも熟睡から覚めたかのように、彼は目を開いて上体を起こしました。二人の兄弟が互いを抱き締め合ったその時、昇り始めた太陽の一筋の光が兄弟に射しました。

「愛しいラクシュマナよ」と、ラーマ神は叫びました。「お前の傷が癒やされて元気になった姿を見て、なんと嬉しいことだろう。お前がそばに居れば私は完全だ。私が日の入り前に悪魔ラーヴァナを惨敗させる。そうすれば、私たちの追放も終わるだろう」

全軍が歓喜してハヌマーンの驚くべき手柄を褒めたたえました。彼らは腕を高く上げて叫びました。「ハヌマーンに万歳、最も勇敢なサルよ！アヨーデヤーの偉大な英雄、ラーマ神とラクシュマナをたたえよ！」

ラーマ神とラクシュマナはハヌマーンを抱擁すると言いました。「見事な剛勇、ハヌマーンよ、この日お前は私の最愛なる弟を救ってくれた。最も高貴で献身的な弟子よ。私は、心のありったけを持って感謝する」

シュリー・ハヌマーンは謙虚に頭を下げました。「敬愛する神よ、ありがとうございます」と、ハヌマーンは言いました。「北方へと海を越え、ヒマラヤに飛んでいく間中、私はあなたとラクシュマナのことだけを考えていました。あなたの姿を心に抱き、あなたの名前を絶え間なく唱えていました。そうなった時——、つまり私のマインドがあなたに没頭し、私の心があなたの愛で浸されていた時——この山をあなたの元に持ってこられるかどうか、疑いの余地などありませんでした。あなたに仕える時には、成就できないことは何もないことを、何度も何度も見えています」

『ラーマヤナ』は、賢者ヴァールミーキによって編さんされた叙事詩で、ラーマ神の物語を彼が語り手となって述べたものです。叙事詩『マハーバーラタ』と共に、インド文学の最高峰の一つとされています。